

< 解 説 >

45年産みかんとりんご

生産費と収益性

最近、45年産の各果実の生産費調査がまとめられたが、このうちから特に温州「みかん」と「りんご」についてみると次のとおりである。

温州みかん

(1) みかんの生産費

・10 a 当り平均生産費は123,199円で、前年より6,885円(5.6%)増加した。これは労働費、農具費、成園費、農薬費の増加によるものだが、特に労働費がいちばん影響が大きい。

一方、100kg当り平均生産費は4,275円で、前年より124円(2.8%)減少した。10 a 当り生産費の増加と逆の方向を示したのは、10 a 当り収量(2,882kg)が前年より9%上回ったためである。

・生産費構成費目別では、労働費が全費用の45.4%、次が肥料費で13.6%成園費11.7%、農具費11.3%、この4費目で82%を占める訳である。

・主な費目の動向

10 a 当り労働費は47,100円で、前年より3,237円(7.4%)の増加。これは労働時間が前年より2.6%減ったのにもかかわらず、労働単価が10.5%上回ったことによる。

また農具費は11,763円で前年より663円(6%)増加した。これは動力散粉機、動力草刈機などの大農具の新規更新と、更新による償却費が増加したためである。

成園費は12,088円で、前年より620円(5.4%)増加した。これは投下資材費や労働費などの上昇を反映している。

・生産費の成園規模階層別の比較

次に生産費が成園階層によって、どういう開きがあるかを見ると次のようになっている。

10 a 当り生産費を成園規模階層別にみると、30 a 未満階層～50～70階層では125,000円～127,000円、70 a 以上の階層では123,000円～114,000円と、規模が大きくなるに従い、生産費はだんだん下がる傾向にある。

このうち労働費は、一般的に規模が大きくなる

につれ低下の傾向を示している。また薬剤散布、収穫作業の省力化なども、上位の階層ほど進み、それが労働費の面に反映している。農具費は、30 a 未満の階層が13,974円ともっとも高く、これもやはり規模が大きくなるにつれ減少の傾向にある。

・生産費は地域間でどうちがうか

10 a 当り生産費を地域別にみると、近畿(和歌山)が155,085円で最高、次いで関東(神奈川144,870円、東海(静岡140,337円)、中国(広島、山口)129,346円、四国116,958円、最低は九州の108,077円となっている。

これは労働費、肥料費やその他の材料費の差によるところが大きいようである。

すなわち労働費についてみると、関東、東海、近畿の労働単価は中国以西の産地より高く、そのうえ関東、東海などは防寒、敷わらなどの管理労働と急傾斜の園地が多い関係で、収穫労働が西筋の産地より10ないし40時間も多いことなどが、労働費を高める要因となっているようである。

肥料費は西筋での投下量が少なく、また、その他の諸材料費も、西筋では防寒材料、敷わらなども少なく済むなどから、低くなっている。

・100kg当り生産費を地域別にみると、四国が4,734円、東海4,663円、関東4,627円、中国4,585円、近畿4,531円、九州3,673円の順であるが、九州以外の他産地間ではそれほど開きがなく、近畿、関東、東海では10 a 当り生産費が高いにもかかわらず、収量が比較的多い関係で、10 a 当り生産費にくらべその差が縮小している。

(2) みかんの収益性

・全国平均の収益性

45年産のみかん10 a 当り粗収益は189,879円。10 a 当り収量は2,882kgで、前年より9%増であったが、台風などによる玉ずれから品質が低下した関係で、販売単価は66円。これは前年より7.1%の値上りで、結局収益増をみたものの粗収益は殆んど前年と変らなかった。

しかし粗収益から生産費総額(費用合計に地代、資本利子を加えたもの)を控除して算出した10 a 当り利潤は66,673円で、前年より7,146円(9.7%)減少した。これは主として生産費の増嵩によるものである。

また粗収益から家族労働費を含まない生産費総額を控除して算出した10a当り家族労働報酬は105,406円で、前年より4,388円(4%)の減、1日(8時間労働として)当り4,144円で、前年より53円(1.3%)減少となった。

さらに品種別にみると

	普通温州	早生温州
粗収益	186,664円	211,841円
利 潤	63,797円	86,250円
家族労働報酬	4,033円	4,906円

で、粗収益、利潤、1日当り家族労働報酬とも早生種が優っている。これは生産費と収量の差に加え、販売単価の差(普通=65円、早生72円)に相当開きがあるためである。

・収益性の成園規模階層別の比較

次に10a当り利潤と、1日当り家族労働報酬を成園規模階層別にみてみよう。

利潤については、とくに一定の傾向はみられない。

これに反し、家族労働報酬では、30a未満階層3,244円、200a以上の階層では5,840円(30a未満の1.8倍)と、規模が大きくなるにつれて、次第に高くなる傾向がある。ハッキリと規模を拡大した方が有利なことを示している。

・地域間で収益性がどの位ちがうか

最後に、10a当りの収益性が各産地間でどのようにちがうかを見ると

利潤=では①九州84,139円、②近畿78,207円、③関東74,497円、④中国55,896円、⑤東海51,960円、⑥四国45,527円で、九州がきわだって高い。(これは九州の生産費が低いことによるものである。)

1日当り家族労働報酬=では①近畿5,015円、②九州4,789円、③関東4,083円、④中国3,072円、⑤東海3,445円、⑥四国3,374円の順である。

近畿の高収益は収量が多いことと、販売価格が比較的高いことにあるようだ。

りんご

(1) りんごの生産費

・りんごの10a当り平均生産費は101,839円で、前年より4,109円(4.2%)増えている。これは、みかんと同様で労働費その他諸材料費の増嵩によ

るものである。

・また100kg当り生産費は3,617円で、前年より509円(16.4%)増えている。10a当り生産費より上昇率が高いのは、10a当り収量が前年より10.5%も低下したことにある。

・主な費目別にみると、①労働費46.2%、②賃借料とその他の料金11.7%、③農具費10.6%、④成園費8.6%で、これら4費目で77.1%を占めている。

10a当りの各費目の動向を見ると、労働費は43137円で、前年より1,419円(4.3%)増えている。これは10a当り労働時間(302.8時間)が前年より4.4%減少したのにもかかわらず、労働単価が7.6%上昇したためである。

農具費は9,891円で前年より412円(4.3%)増えた。これは貨物自動車、動力散粉機、動力草刈機のような大農具の導入による償却費の増加によるものである。

「その他の諸材料費」は5,597円で、前年より1,466円(35.5%)増えた。増加要因は人工授粉用花粉、敷わらの増加、単価の高い紙袋の使用などが主なものである。

・生産費の成園規模別階層の比較

30a未満と、30~50aの階層では107,000円から109,000円台であるが、みかんと同様規模が大きくなるにつれて低くなる傾向を示している。これを項目別にみると、労働費は30a未満階層が50,370円でいちばん高く、規模が拡大するにつれて低下している。

賃借料およびその他の料金は、150a未満の階層は1万円台で、階層間に大きな差はないが、150~200a階層と、200a以上の階層では8~7000円へと低下している。

・地域間で、どのくらいちがうか

国 光

・国光10a当りの生産費は全国平均で106,341円。①青森108,116円、②長野114,911円で、やや差がある。これは農機具装備の充実で農具費が高いことと、灌漑の水利費負担金がかかることが主な要因とされる。

・100kg当り生産費は全国平均で3,483円であるが、青森3,418円、長野3,476円と、殆んど差はない。ただ青森は老木園が多いためか、10a当り取

量が長野より低く、10 a 当り生産費の優位性が帳消しになった勘定になる。

紅 玉

紅玉の100kg 当り生産費は、全国平均で89,460円。産地別では長野100,667円、青森8,984円、岩手82,524円、山形81,733円の順で、長野が大幅に上回っている。これは農機具装備の充実に伴う償却費、灌漑の水利負担金などが影響しているためとみられている。

・紅玉の100kg 当り生産費は、全国平均で2,830円で、産地別では岩手3,102円、長野2,980円、青森2,899円、山形2,368円の順である。

スターキング

・スターキングの10 a 当り全国平均生産費は101,220円で、長野119,000円、岩手102,000円、山形、青森、福島は90,000円となっている。主産県としての青森が96,486円で、福島は94,658円より高くなったのは、有袋栽培や袋掛作業によると見られている。

・100kg 当り生産費は全国平均で3,822円で、青森4,722円、福島3,384円で、青森は約40%高くなっている。これは福島が天候不良で収量が減少したものの、青森より37%上回ったためと見られている。

(2) りんごの収益性

・10 a 当り利潤は51,685円で、前年より26,433円(41.7%)、1日当り家族労働報酬は2,714円で、前年より926円(51.8%)大幅な増加となった。

10 a 当り収量は2,816kgと、前年より10%ほど下回ったが、スターキング、印度など高級ものは作柄もよく、全般的に高値で販売されたため、粗収益は前年より23.8%も増加した。

・主要品種別の10 a 当り収益性についてみると、利潤=①スターキング82,681円、紅玉44,789円、国光41,684円と、高級品種と普通品種間に大きな差があることが注目される。

1日当り家族労働報酬でも、スターキング4,305円と、紅玉2,695円、国光2,198円を大幅に上回っているが、これはスターキングの価格が紅玉や国光より50~70%高いためである。

・収益性は成園規模階層別でどちらがうか

りんごの10 a 当り利潤を成園規模階層別にみると、100 a 未満の階層では5万円前後、100~150 a 階層では6万円台と高くなっているが、150~200 a、200 a 以上の階層になると3万円台と半減している。

これは比較的上位の階層に国光、紅玉などの普通品種を栽培する農家割合が多く、品種間の販売単価の差が大きく影響しているとみられている。

また1日当りの家族労働報酬は、利潤が高かった100~150 a の階層が3,000円台になっているほかは、2,000円台を示している。

・収益性が主産地間でどちらがうか

国 光

国光の10 a 当り利潤と、1日当りの家族労働報酬を主産県の青森、長野についてみると、

利潤=青森50,504円、長野37,190円

1日当り家族労働報酬=青森2,350円、長野2,120円

と、いずれも青森が高い。これは青森が10 a 当り収量が低いのに、販売価格が長野を上回ったためと見られる。

紅 玉

紅玉の10 a 当り利潤と、1日当り家族労働報酬をみると

利潤=山形58,661円、長野58,104円で、青森、岩手の2~3万円台を大幅に上回っている。

また1日当り家族労働報酬も山形が3,601円と高く、長野2,960円、青森2,352円、岩手は2,000円に満たない。

スターキング

スターキングの10 a 当りの利潤と、1日当り家族労働報酬は

利潤=青森99,195円、福島63,117円

1日当り家族労働報酬は青森4,451円、福島4,264円と、青森がいずれも上回っている。

これは10 a 当り収量が低いのに、販売価格が青森の98円に対し、福島が55円と相当の値開きがあるためらしい。

(以下、日本なし、ぶどうその他の果実についても触れたいが、紙数に制限があるので、次の機会に譲りたい。)